

〔委託研究V〕

心身障害児の早期発見に関する研究

主任研究者 笠 松 章
平 山 宗 宏

I 小児の心身障害予防に関する研究

研究担当者 研究第1部 本 多 洋

(分担研究)

1) 小児の心身障害の発生頻度に関する調査

研究第3部 松 島 富之助

調査目的

国民の資質の向上を計るためには、小児の健全育成が最も必要であるが、そのためには、先天異常の実態を把握し、それに対する対策を講ずることが何よりも急務である。

我々は心身の発達に悪影響を与えと思われる疾患について、発生頻度を算出する目的で本調査を行った。

調査方法

一般にこれらの調査を行う方法としては

- 1) Retrospective Study と
- 2) Prospective Study の2つに分けられる。

Retrospective Study は調査は容易であるが、その児の妊娠、出産及びその後のできごとを母親などにきくために、記憶が不正確であって、信頼できない欠点がある。これに反して Prospective Study においては、結論がでるのに長時間を要するという点はあるが、正確にデータがとれる長所がある。

我々が行う調査は、愛育病院の保健指導に在所している例をもとに行っているが①愛育病院において、妊娠中から入学前までの間に一貫して保健指導態勢がとられていて、しかも満1才までの受診率は93%(6才で約10%)に及び、しかも来所しない例については、往復葉書による問い合わせを行っているので、疾患の把握率は、ほぼ

100%である点

②対象児数が昭和33年7月1日から昭和46年3月までに1万人の多数に上っている点

③Follow up することにより、疾患がより精密に鑑別される点

から非常に精度の高いデータが得られると考えられるが、一度に全てを分析するのは非常に労力を必要とするのが実情である。そこで、我々は昭和44年1月1日から12月31日の間に、愛育病院で出生した897例のうち、以後同病院保健指導部に定期的に来所した小児836例(93.2%)について、満2才(昭和46年12月31日)まで追跡して、疾患の分析を行った。

調査成績

1. 疾患の発生頻度

2年間の報告による疾患の発生頻度は、第1表の如くである。

1) 心身発達に重大な障害となる疾患：

精神薄弱(含疑い)は5例(0.6%) てんかんは2例(0.2%)先天性心疾患9例(1.1%)で合計22例(2.6%)であった。このほか急死が1例にみられた。

2) 局所の障害となる疾患：

斜頸が25例(3.0%)と最も多く、ついで、ソケイへ

第1表 保健指導部受診者中の疾病・異常の発現率

対象者：昭和44年1月1日～12月31日出生総
数897例中来部者836例（93.2%）について

	例数	%	満1才児 の障害残 存者	残存%
てんかん	2	0.2	0	0
精神薄弱	5	0.6	5	100
先天性心臓疾患	9	1.1	8 (死亡1)	88.9
斜頸	25	3.0	0	0
斜視	5	0.6	5	100
L・C・C	5	0.6	2	40
血管腫	23	2.7	23	100
ソケイヘルニア	8	1.0	0	0
その他の奇型	7	0.8	3	42.9
その他の疾患	10	1.2	0	0
新生児ケイレン	5	0.6	0	0
落陽現象	2	0.2	0	0
新生児敗血症	1	0.1	0	0
鎖骨骨折	1	0.1	0	0
死亡(含む急死)	8	1.0		
計(延)	116			

ルニア8例（1.0%）その他の奇型6例（0.7%）斜視とLCCが各々5例（0.6%づつ）である。

その他では、血管腫が23例（2.7%）その他の疾患が10例（1.2%）にみられた。

2. 疾患別にみた追跡的成績

1) 心身発達に重大な障害となる疾患：

(1) てんかん：

2例とも新生児期にけいれんを伴ったもので、第1例は脳が2か月半で、第2例は4か月以後に復帰していた。即ち、満1才の時点においては、てんかん患児は0であった。（第2表）

しかし、てんかんは幼児期に出現するものが多いので、今後の追跡的調査が必要と考える。

(2) 精神薄弱：

明らかな精神薄弱児は4例、精神薄弱の疑いは1例である。（第3表）

①明らかな精神薄弱児4例のうち、3例までが男児であり、女児が1例であり、その頻度は0.48%である。

a) このうち2例（No. 1, 2）はダウン症候群である

第2表 E・P

No.	性	氏名	生下時 体重	在胎 期間	異 常			知能	脳波
					妊 娠 時	分 娩 時	新生児期		
1	男	賀○集○郎	2,643g	35週0日	34週 高位破水	自然分娩 仮死I～II°	35週早産 四肢振頻2 9日目Sun set(+) アプガル指数 3→8	正常	10日(+) ↓ 2ヵ月15日 (-)
2	男	大○和○	2,620g	38週5日	切迫流産 14週以降 高血圧	自然分娩 前期破水 臍巻頸2回	四肢振頻1	正常	4ヵ月(±) ↓ (-)

第3表 精神薄弱

No.	性	氏名	父母の年齢	生下時 体重	在胎期間	異 常			備 考
						妊 娠	分 娩	新生児	
1	男	山 ○ ○	父36 母30	3,201g	37週2日	(-)	微弱陣痛	ダウン 症候群	1才8ヵ月 1人歩き未 VSD(-)
2	男	安○ 宏○	父33 母29	3,187g	38週	(-)	(-)		1才1ヵ月伝い歩き 1才6ヵ月叱るとわかる VSD(+)
3	男	渡○ 俊○	父28 母26	2,765g	39週1日	27週切迫流産	児切迫仮死 鉗子分娩	(-)	1才7ヵ月 現在歩行不能 発語(-) 2ヵ月 EEG正常

本多他：心身障害児の早期発見に関する研究

4	女中○	尚○	父30	母26	2,501 _g	39週2日	(一)	前期破水 Ⅱ単腎位→ 牽出術	(一)	1才10ヵ月発語(一) LCC合併 IQ47 1才3ヵ月 EEG正常
(±)5	女中○	和○	父31	母33	1,060 _g	29週1日 二卵性双胎	(一)	前期破水 アブ点4 出生児仮死 (+)	80日目までゾ ンデ栄養 83日間クベ ス チアノノーゼ(+)	7ヵ月首坐り(±) 8ヵ月機中電灯の先は少 しみるよう 未熟児網膜症→ 1眼失明1眼弱視

ので、418例に1例(0.24%)となり、一般にいわれる0.15(Nelson)に比べると高率である。この頻度については、対象児10,000例について再調査を行う予定である。

b) あとの2例のうち1例は(No.3)1才7ヵ月で歩行も発語も不能であるが、分娩時に児の切迫仮死がみられ、鉗子分娩で出生している点に関係があるのかもしれない。

他の1例はLCCを合併しているが、IQ47(1才1ヵ月)でEEG(1才3ヵ月)は正常である。この例は、前期破水があり、牽出術により出生したが、仮死はなかった。

②精神薄弱の疑いのあるものは1例(0.12%)にみられた。二卵性双生児のうちの1例で、しかも29週の早産であり、未熟児網膜症を合併して失明している。

(3) 先天性心疾患：(第4表)

9例(1.1%)のうち、診断の明らかなものは8例であり、

①5例がV.S.D(全体の0.6%)であり、あとはボタロー氏管開存、肺静脈還流異常症、肺静脈弁狭窄症が各々1例である。これらの例は心電図は、前虎の門病院浅田淳一氏及び診察は主に、国立小児病院大島正浩氏が当った。

②このうち死亡例はNo.7(肺静脈還流異常症、7ヵ月で死亡)である。予後の不明なもの2例(No.4 No.8)である。

③心雑音を新生児期に聴取したものは5例あり、4例は生後10ヵ月以後に聴取して発見してゐる。

④妊娠中の経過は、正常のものが5例、異常があったものが4例であるが、先天性心疾患の発生する妊娠3ヵ月までの異常例は2例(No.4つわりが強度、No.8妊娠3ヵ月の時切迫流産で2ヵ月間入院)であった。

第4表 先天性心疾患(9名 1.1%)

No.	性	氏名	生下時 体重	在胎 期間	妊娠中	分娩 方式	新生児期	病名	予後	IQ	合併
1	男	庄○知	2,850 _g	42週5日	(一)	正常	(一)	V.S.D	1才心音不純 OP(一)	O・B	(一)
2	男	藤○彰	2,900	37週4日	(一)	正常	Herz G(+)	V.S.D	1才6ヵ月 GⅢ OP(一)	O・B	(一)
3	男	本○清	3,525	40週2日	7ヵ月 妊娠貧血	帝王 切開	Herz G(+)	V.S.D	1才6ヵ月 G(++) OP(一)	O・B	(一)
4	男	木○壮○	2,744	38週1日	悪阻(++) 前期破水	正常	Herz G(+)	V.S.D	1ヵ月目のみ来部以後東京女子医 大へ 予後不明		
5	男	安○宏○	3,187	38週0日	(一)	正常	Herz t tachycardie	V.S.D	1才6ヵ月迄(心雑音)1才4ヵ 月つたい歩き、1才6ヵ月現在1 (?)人歩き(一)一人立ち(一)	ダウン 症候群	(+)
6	女	松○ 真○子	3,260	40週6日	(一)	正常	(一)	ボタロー 氏管開存	OP(一)	運動機 能やや おくれ	(一)
7	女	鈴○優○子	2,625	38週5日	(一)	正常	(一)	肺静脈還 流異常症	7ヵ月死亡(国立小児病院) 1ヵ月末より4ヵ月迄富山に		
8	女	市○祐○	2,788	37週1日	3ヵ月切迫 流産、2ヵ 月入院	正常	(一)	肺静脈弁 狭窄症	4ヵ月から大阪(聖バルナバ 病院) 心雑音(+)と5才位でope?	正 常	
9	女	門○恵	2,140	36週4日	9ヵ月末 尿蛋白(+)	正常	クベース5日 間 Herz G(+)	心雑音	1才2ヵ月(+)	O・B	(一)

2) 局所の障害となる疾患

(1) 斜頸: 25例(3%)にみられたが、(第5表)

① 6か月以内に治癒したものが17例(68%)と大半を占め、9か月以内は23例(92%)に及んでいる。

② 治癒は自然治癒が24例(96%)であり、手術をしたものは1例(6か月児)のみである。

③ 障害の発生側は、右又は左が最も多く(各々48% 40%) 両側性4%であった。なお、部位の不明が2例あった。

④ 分娩様式との関係は、正常分娩例が13例(52%)であったが、異常分娩の中では、骨盤位は10例(40%)と多く、鉗子分娩が2例(8%)にみられた。これを考案してみると、斜頸の発生には正常分娩や鉗子分娩の時にみられるのは、胎児期にすでにみられる斜頸であるが、骨盤位分娩にみられるものは、上の型と分娩時の胸鎖乳頭筋の断裂による型がふくまれるものと思われる。

(2) 斜視:

2才までの間に明らかな斜視となったものは5例(0.6%)である。(第6表)

① 5例とも内斜視であって、外斜視、その他の斜視はみられなかった。

② 妊娠中の異常はみられず、分娩様式は正常が3例、前期破水で鉗子分娩になったものが1例、吸引分娩1例である。その他、切迫仮死が1例みられた。

③ 新生児期は異常のないものが4例、落陽現象のみられたものが1例(No.4)であるが、知能の発達は正常である。

第5表 斜頸の分析

		例 数	%
総 数		25	100.0
男		11	44.0
女		14	56.0
分娩時異常	(一)	13	52.0
	骨 盤 位	10	40.0
	鉗 子	2	8.0
障害部位	右	12	48.0
	左	10	40.0
	両 側	1	4.0
	不 明	2	8.0
治癒月令	3カ月以内	1	4.0
	6カ月以内	16	64.0
	9カ月以内	6	24.0
	12カ月以内	1	4.0
	不 明	1	4.0
自 然 治 癒		24	96.0
合併症	(+)	5 (LCCヘル =72 外反足・ 血管腫2)	20.0
	(一)	20	80.0

第6表 斜 視 (5例 0.6%)

No.	性 氏 名	生下時 体 重	在胎期間	分娩様式	新生児期	斜 視	予 後	合併症
1	男上○ 晃	3,126 ⁹	40週1日	吸 引	(一)	内	2才まだ軽度 (+)	(一)
2	男松○ 剛	3,283	41週0日	正常・ 切迫仮死	(一)	内	2カ月の時のみ記載 1才8カ月来部 予後不明	(一)
3	男増○ 竜	2,704	38週1日	鉗子、前期 破水	(一)	内	6カ月OPあと自然治療をまつ	(一)
4	女錦○ 妙	3,841	40週4日	正 常	Sunset (+)	内	1才5カ月(±)	(一)
5	女錦○ 貴	2,746	38週3日	正 常	(一)	内(ごく軽い)	3才位まで様子をみて処置	(一)

④ 合併症は、みられなかった。

(3) 先天股関節脱臼(LCC)

第7表の如く5例のLCCがみられた。(0.6%)

① 性別: 女兒にやや多かった。(女3例 男2例) 一般に女兒に多いとの報告に一致している。

(2) 分娩時に骨盤位のもものが3例にみられている点に注

第7表 先天性股関節脱臼 (L. C. C)

No.	性	氏名	生下時 体重	在胎 期	異 常			部位	治 療 時 期	治 療	備 考
					妊 娠 時	分 娩 時	新 生 児 期				
1	男	内○ 俊	3,415 ^g	40週1日	(-)	(-)	(-)	左	1年1ヵ月	ギブス	
2	男	小○ 巻 滋	3,726	40週4日	9ヵ月最低血圧 134/90	(-)	(-)		5ヵ月半	ベルト	
3	女	宮○ 愛	3,159	40週4日	(-)	骨盤位 牽出術 前期破水	仮死1度 3日目 Sunset (+)	右	11ヵ月	ベルト	智 能 正 常
4	女	中○ 尚○	2,501	39週0日	(-)	骨盤位	(-)	左	5ヵ月	ベルト	Mental Retarded
5	女	岸○ 明○子	1,830	34週3日	単腎位	骨盤位	34週早産、未熟児 仮死1度、24日間 クベース交換輸血 アブガル指数 6→10	1才3ヵ月 現 在 ギブス		ギブス	

目したい。

③部位は左2例、右1例であと2例は不明である。

④治療はベルト装着例が3例、ギブス固定が2例である。

⑤治療の時期は5例中4例までが1才1ヵ月以内で治療していたが、1例(No.5)は1才3ヵ月でまたギブスを装着して、以後来所していない。

⑥知能は5例中4例が正常、1例に遅滞がみられている。

(4) 鼠蹊ヘルニア

第8表の如く鼠蹊ヘルニアは8例(1.0%)にみられた。

①性別：男児7例、女児1例で、圧倒的に男児が多いことは、今までの報告に一致している。

②出現部位：右側が4例(50%)左側が2例(25%)両側2例(25%)であったが、右側に多くみられるとの従来の報告と一致している。

③生下時体重は、すべて3,000gをオーバーしていて、未熟児に出現しやすいとの報告を否定している。

④発見の時期は、2～3ヵ月までであったが、いきみが強い時期に一致している点、興味がある。

⑤1才以後に出現するものもあるので、今後のヘルニアの出現をチェックせねばならない。

⑥治療は、8例中7例まで手術をうけている。手術の時期は、2ヵ月～11ヵ月の間であった。1例は、2ヵ月までの記載のみで以後自然治療したようである。

(6) その他の奇型

第9表の如く、その他の奇型は7例(0.8%)にみられた。

第8表 鼠蹊ヘルニア

No.	性	氏名	生下時 体重	側	予 後	備 考
1	男	福○ 亮○	3,017 ^g	左	2ヵ月 OP	
2	男	大○ 竜○	3,514	両側	6ヵ月 OP	
3	男	村○ 賢○	3,582	両側	10ヵ月 OP	
4	男	田○ 哲○	3,075	右	(-)	以後記載なし、自然 治療?(2ヵ月 まで)
5	男	横○ 公○	3,325	右	10ヵ月 OP	
6	男	浅○ 純○	3,056	左	11ヵ月 OP	
7	男	上○ 忠○	3,020	右	7ヵ月 OP 両側	合併症：斜頸(+) 赤アザ
8	女	一○ 瀬 考○	3,613	右	10ヵ月 OP	

①奇型の種類：口蓋破裂2例(No.4、No.5)右耳殻奇型1例、脊髄ヘルニア1例、停留嚢丸1例、短指症1例、外反足1例である。

②妊娠中の異常は、カルテ粉失の1例(No.4)を除く6例のうち、2例にみられた。

即ち、No.1(右耳殻奇型)は妊娠3ヵ月に切迫流産がみられた。No.2(脊髄ヘルニア)は、妊娠中に母親がトキソプラズマ症であることが判明した。

③分娩、新生児の異常はみられなかった。

④知能は、すべて正常である

⑥ その他の疾患：

その他の疾患が、2才までに発見されたものは、第10表の如く、10例(1.2%)にみられた。

①疾患分類：鶏卵アレルギーは3例(No.1、2 3うち

第9表 その他の奇型

No.	性	氏 名	生下時 体 重	在 期 胎 間	異 常			奇 型 の 種 類	知 能	備 考	合併症
					妊 娠	分 娩	新 生 児				
1	男	大○統○	3,906 ^g	40週1日	3カ月切迫 流産	(-)	アプガール指 数 7→9	右耳殻奇型	正常	7カ月まで来部 Op (-) 形成の予定	
2	男	柴○嘉○	3,316	41週0日	トキソプラス マ	(-)	後頭部腫瘍 (+)	脊髄ヘルニア	正常	7カ月 Op	
3	男	杉○和○	3,276	39週1日	(-)	(-)	(-)	停留睾丸	正常	1才8カ月現在 Op (-)	
4	男	中○地 哲○	3,712	41週2日	(-)	(-)	(-)	口蓋破裂	正常	退院後来所せず、 →東京医歯大へ通 院	
5	女	佐○由 子○	3,047	40週2日	(-)	(-)	(-)	口蓋破裂 (軽度)	正常	1才6カ月 Op	
6	女	田○陽○	2,494	37週5日	(-)	37週早産	(-)	短指症	正常	EEG・PBI 正常	
7	女	小○恵	2,849	38週4日	(-)	(-)	(-)	外反足	正常	4カ月治療	斜頸

第10表-1 その他の疾患 (10名 1.2%)

No.	性	氏 名	生下時 体 重	病 名	予 後	備 考
1	男	秋○光○	2,873 ^g	鶏卵アレルギー 8カ月→	6才で症状(-)	Naevus pigment
2	女	松○明○	3,482	鶏卵アレルギー 5カ月→	7カ月で全上	兄が2才まで卵アレルギー
3	男	相○司	1,682	鶏卵アレルギー+牛肉アレルギー	10カ月～1才3カ月で全上	二卵性双生児 喘息あり
4	男	山○正○	3,262	3カ月肛門周囲膿瘍	op しないで治療	アトピー
5	男	小○信○	2,693	痔瘻→4カ月 op	発見1週間後に op	臍ヘルニア
6	男	黒○耕○	3,225	口唇マヒ (右)	6カ月～8カ月 治療	鉗子分娩
7	男	西○入○ 二	3,410	血管内皮腫 (左胸)	16日目 国立小児病院でop 後OB	2才0カ月 左上腕に新しい血管腫
8	男	篠○弘○	3,116	右股関節、骨髓炎 1才8カ月	原因不明、治療で治療	
9	男	黒○幹○	3,116	特発性血小板減少症 4カ月	出血時間17分→ 血小板数3.4万、1カ月後治療	
10	女	工○ 麻○美	2,497	腸重積症	10カ月現在で4回反覆 polyp などの検索はせず。	兄も5カ月7日で腸重積

1例は牛肉アレルギー合併) 肛門周囲膿瘍と痔瘻が各1例 (No.4、5) 口唇マヒ1例、血管内皮腫1例 骨髓炎1例 特発性血小板減少症1例 腸重積症1例である。

②今回の調査では、脳性小児麻痺、血液疾患、免疫不全症候群、フェニールケトン尿症などの疾患はみられなかった。

本多他：心身障害児の早期発見に関する研究

②血管腫（ストローベリー型）

ストローベリー型の血管腫は、第10表の如く23例(2.7%)にみられた。

a) 性差：女児15例(65.2%) 男児8例(34.8%)で女児に多かった。

b) 合併症は3例にみられたが、身体的異常の合併症は、1例(鼠蹊ヘルニア+斜頸)にすぎなかった。

第10表—2 ストローベリー型血管腫
836例中23例(2.7%)

23例	N		%	
性	男	8 例	34.8	
	女	15 例	65.2	
合併症	3		13.0	鼠蹊ヘルニア+斜頸 1例 臍ヘルニア 1例 肛門周囲膿瘍 1例

(7) 死亡例

生後満1才までに死亡したものは、第11表の如く、897例中11例(出生1,000対12.3)であった。このうち、

1) 早期新生児期死亡は9例であり、そのうち低体重児は8例(内1例低体重児+D₁トリスミー+トキソプラズマ症、未熟児7例)あとの1例は、敗血症+髄膜炎(No.2)であった。

2) 新生児期以後の死亡は2例(No.10, No.11)であるが、死因は、No.10は突然死(窒息死)で、No.11は肺静脈還流異常症であった。

(8) 新生児期に問題のあった児の予後

新生児期に心身発達に影響のある症状例のその予後の追跡結果は、第12表—(1), (2)のようである。即ち、

①新生児けいれんは5例(0.6%)にみられた。(第12表—(1))

a) 妊娠中の異常は、5例中4例にみられた。即ち2例は、胎盤機能不全症、1例は貧血と高血圧を合併、1

第11表 乳児死亡例

No.	氏 名	性	死 亡 日	死 亡 令	生下時 体 重	在 胎 期	死 因	備 考
1	辻○	女	44. 5. 20	1時間	1,010	25週	未 熟	
2	高○	女	44. 4. 7	2時間	2,900	—	髄膜炎 敗血症	母妊娠中高熱あり
3	雨○絵○子	女	44. 4. 28	12時間	2,068	32週	肺拡張不全	双児第1児
4	加○	女	44. 8. 10	12時間	2,023	41週	D ₁ トリスミー トキソプラズマ症	
5	陥○	男	44. 8. 8	1日	1,185	29週	肺拡張不全	
6	近○ あ○	女	44. 9. 15	2日	1,930	33週	肺拡張不全	
7	佐○	男	44. 1. 26	3日	2,000	39週	重症中毒症	
8	渡○ 健	男	44. 6. 27	3日	1,979	37週	肺機能不全	双児第2児
9	三○	男	44. 12. 30	3日	1,986	33週	腎発育不全	双児第2児 9ヵ月妊娠中毒症
10	坂○季○子	女	45. 4. 27	4ヵ月27日	2,361	38週	窒息死	
11	鈴○優○子	女	44. 9. 30	7ヵ月	2,625	38週	肺静脈還流異常症	

例は妊娠中毒症であった。

b) 分娩時異常は2例にみられた。即ち、切迫仮死2例(No.1, No.2)であり、その中の1例は鉗子分娩であった。

c) けいれんの部位は、四肢が全例(四肢+顔面2例)である。

d) けいれんの持続日数は、5日間以内であった。

e) 脳波所見は新生児期に正常のもの3例であった

が、あとの2例も2ヵ月及び6ヵ月で正常となった。

f) 知能は全例正常である。

②落陽現象をみたものは2例(0.24%)であった。

a) 落陽現象の治療期間：1例(No.2)は、9日目に1日だけSunset(+)で眼球振盪を合併していたが、あと治癒した。他の1例は、2ヵ月まで(+)、以後(-)となった。

b) 妊娠中の異常1例(No.2)は、34週で破水し

第12表 新生児期に問題のあった児とその後の予後 (1)

	No.	性	氏 名	生下時 体 重	在 胎 期 間	異 常			障 害 部 位	持 続 日 数	E ・ E ・ G	予後 知能	合併症	備 考
						妊 娠	分 娩	新生児						
新生児けいれん	1	男	渡○ 英○	2,846 ^g	39週4日	貧血 高血圧	鉗子 切迫仮死	仮死1度 けいれん	四肢	0~3日目	正常	正常	(-)	
	2	男	山○ 暁○	3,000	42週5日	胎盤機能 不全	切迫仮死 分娩停止	けいれん (2日間)	四肢 下顎	0~4日目	正常	正常	(-)	
	3	男	北○ 総○ 郎	1,942	39週1日	胎盤機能 不全	(-)	けいれん	四肢	3日目~ 1日間	正常	正常	(-)	
	4	男	三○ 祐○	1,586	33週3日	9ヵ月 妊娠中毒	(-)	けいれん	四肢	0日目~ 2日間	6ヵ月 正常	正常	(-)	双生児仮死
	5	女	会○ か○ り	3,472	39週3日	(-)	(-)	けいれん	四肢 顔面	1日目~ 5日間	2ヵ月 正常	正常	(-)	中止後 けいれん →E・P

新生児期に問題のあった児とその後の予後 (2)

落陽現象	No.	性	氏 名	生下時 体 重	在 胎 期 間	異 常			ビリル ビン値	交換 輸血	治 療 日 数	E・E・G	知能	合併症
						妊 娠	分 娩	新生児						
	1	男	岩○ 壮○	2,695 ^g	40週4日	(-)	羊水混濁 (Ⅲ)	kafein Statz 多量	1.5	(-)	2ヵ月代で 減ってきた 後不明	正常	正常	(-)
	2	男	賀○集○郎	2,643	35週0日	34週破水	高位破水、 過強陣痛、 陰部神経麻 痺	仮死Ⅰ～Ⅱ	11.7～ 14.0	(-)	9日目で Sun Set 1日のみ 眼球振盪	EP ↓ 正常	正常	
新生児敗血症	No.	性	氏 名	生下時 体 重	在 胎 期 間	異 常			障 害 程 度	治癒、月令	E・E・G	知能	合併症	
						妊 娠	分 娩	新生児						
	1	女	窪○ 久○	2,234 ^g	38週6日	貧 血	羊水混濁 臍巻頸1回	胎盤機能不 全症候群	Viccillin 服 用	2週新生児室 ↓ 1週間小病 26日目OB	正常	正常	(-)	
左鎖骨骨折	No.	性	氏 名	生下時 体 重	在 胎 期 間	異 常			障 害 程 度	治 療 月 令	合併症		備 考	
						妊 娠	分 娩	新生児						
	1	女	原○佳○子	3,268 ^g	39週1日	切迫仮死	吸引分娩 臍巻頸 ゆるく1回		ヒビが 入った	1ヵ月6日	(-)			

た。

c) 分娩時異常は2例ともにみられ、羊水混濁1例、高位破水、過強陣痛を伴ったもの1例ある。

d) 新生児期：2例とも異常があり、仮死1~2は1例、他はカフェーザツ大量に嘔吐した。

e) e血清ビリルビン値は高くなかった。

f) EEGは1例正常、1例異常であったが経過を辿るうちに正常になった。

g) 知能はともに正常で、合併症はなかった。

③新生児敗血症は1例にみられたが、生後26日で治癒し、知能も正常である。

④左鎖骨骨折は1例にみられたが、1ヵ月で治った。

結 論

小児心身の発達に悪影響を与えることが予測される先天性奇型などの疾患の発生頻度を算出する目的で、昭和44年1月1日から44年12月31日までの間に、愛育病院で出生し、以後満2才になるまで、同病院保健指導部に来所した小児836例につき、疾患を分類し、併せて満1才における疾患の残存率をみた結果、

1) 精神薄弱児は5例(0.6%)、先天性心疾患9例(1.1%)てんかん2例(0.2%)の発生頻度であった。

2) 局所の障害のうち、主なるものは斜頸25例(3.0%)が最も多く、ついで鼠蹊ヘルニア8例(1.0%)斜

視5例(0.6%)先天股脱5例(0.6%)その他の奇型7例(0.8%)がみられた。

3) 満1才の時点における疾患の残存率をみると、精神薄弱児及び斜視は変わらず、先天性心疾患は1例減少(死亡のため)、先股脱は3例減少(2例残存)した。しかし、てんかん、斜頸、鼠蹊ヘルニアは0となった。

(分担研究)

2) 新生児期の異常の追跡的研究

研究第2部 小 泉 武 宜

調査目的

新生児養護、周産期管理は産科医、小児科医及び行政機関の努力によって、著しく改善されてきた現在でも、周産期死亡率また将来現われるかもしれない肉体的または知能的障害の問題が種々残されている。

そこで新生児期におこった新生児の問題点とそれが、その後どのようなようになっていくかをみる目的で調査を行った。

乳幼児期に及ぼす影響を検討しながら、周産期管理改善をはかってゆきたい。

調査方法

1) 対 象

昭和46年1月1日から12月31日迄に、愛育病院で958人の産婦から生れた964例(男471人、女493人)が調査対象となっている。なお第一呼吸がなく、分娩室より新生児室に移される事なく死亡が確認された者は今回の対象から外した。

2) 調査方法

前記調査対象児の新生児カルテ、保健指導部カルテにより集計を行った。

研究結果及び討論

1) 母の年令、児の在胎期間を第1表に、母の既往歴、経産歴を第3表に掲げたが、これらの組合せの中から分娩及び児の異常に関係があると思われる20才未満の産婦及び高年初産婦についてみると、20才未満の産婦は認められなかった。高年初産婦に関しては、30才～34才の初産婦54例、35才以上の初産婦が18例、これらの内、帝王切開の適応となったものが30才～34才6例、35才以上3例であった。また、当病院の初産/経産比から地域管理病院の傾向がうかがわれる。

4) 新生児期にけいれん、落陽現象などの症状をなした7例は、満1才の時点で、心身共に正常であった。

今後、愛育研究所保健指導部にある満1才以上までfollow upされたカルテ10,000枚について、同じ方法により、先天異常型及び異常例の分析を行う予定である。

第1表 母の年令と在胎期間

人数		T	T/N (%)	♂	♀
項目					
母の年令	20才未満	0	0	0	0
	20～29才	676	70.1	332	344
	30～34才	210	21.8	100	110
	35～ 才	78	8.1	39	39
在胎期間	～27W	0	0	0	0
	28～32W	3	0.3	1	2
	33～37W	93	9.7	46	47
	38～42W	858	89.0	419	439
	43～ W	10	1.0	5	5
合 計 N		964	100	471	493

第2表 母既往と経産歴と栄養方法

人数		T	T/N (%)	♂	♀
項目					
母既往	流 早 産	178	18.5	90	88
	未熟児出産	8	0.8	5	3
	T・B	14	1.5	7	7
	梅毒	3	0.3	2	1
経産歴	初 産	476	49.4	235	241
	経 産	488	50.6	236	252
栄養方法	母 乳	822	85.3	397	425
	混 合 乳	111	11.5	60	51
	人 工 乳	31	3.2	14	17
合 計 N		964	100	471	493